

輸送船機関士の航海日誌

1938～1945

渡部義治さんの手記（要約）

輸送船機関士の航海日誌

渡部義治さん（大正3年生まれ 1914～1999）の手記（要約）

昭和13年11月17日、東京高等商船学校を卒業。当時海運界は空前の人手不足で、我々の就職は引っぱりだこだった。自分は日本郵船会社の入社試験を受け、採用となった。

この時、機関科98期生に海軍の教育召集が来て、自分を含め2～3名が身体検査で海上勤務に適さずとの判定で召集解除となった。実習中のデカダン生活のたたりで残念であったが、召集された連中は、戦艦、小型巡洋艦、駆逐艦、潜水艦等に乗組み、後にほとんど戦死してしまったと聞いた。

入社後は、会社に頼んで乗船勤務についた。三等機関士で月給70円、手当14円だった。昭和14年1月29日より15年1月18日まで貨物船盛岡丸に乗船。大阪港を出港し、中国の上海、揚子江の南京まで、主として軍需品を積んで往復した。給料は主として父に送るようにし、乗船中の生活費は手当でまかされた。給料は当時の東大卒の初任給を上まわっていた。

—佐渡丸の最後—

ニューヨーク航路

盛岡丸を昭和15年1月18日に横浜港にて下船し、同月24日に佐渡丸に乗船した。次席三等機関士で月給80円。手当36円。

佐渡丸は、日本本土を出港すると、北太平洋を航海し、ロスアンゼルス港を目指す。冬の北太平洋は、日本列島ぞいに北上する低気圧の墓場になっていて、大うねりの連続で、遠方に見える外航大型船のマストが、うねりの谷間に入ると見えない程である。ある時の復路では、スクリューが脱落してSOSを発信していた船舶等あり、佐渡丸の16ノットの速度が9ノットになってしまう程であったが、酔いに平気になっていた自分は、却って腹がへる始末であった。

さて、米国東側に達し、南下する頃には波は静かとなり、やがて、ロスアンゼルス港に入港し、燃料の給油をする。記憶によれば自分は冷凍系を担当していて、日本から石油缶につめられた食用蛙を冷凍倉庫より荷降ろししたと覚えている。ロスアンゼルス港では、上陸の際、指紋押捺をやらされた。使用金銭は4円が1ドルで、航海手当の20円が5ドルで、これ以上は制限されていた。米国の油会社のバスで市内は近くの海水浴場のロングビーチまで観光のサービスを受けた。途中広大な大陸に石油掘削装置が林立していて、その規模の大きさに目を見張った。ロングビーチでは大きな白人がピンクの肌をしているが、そばによるとケムクじゃらで何か臭くて気持ちが悪かった。

さて本船はロスを出港してカリフォルニアの沿岸を南下する。海水は青く澄み静かで、北太平洋の荒波を経てきた我々には、真に気持ちの良い航海となる。

パナマ運河

パナマ運河は、最初スエズ運河の開通に成功した仏人レセップが手掛けたが、熱帯病と狭い岩盤の開通困難に突き当たり、ついに失敗し、のちに米陸軍により多大の犠牲を払い開通に成功した。水門を経てすぐクレブラカットという切り通しがあり、岸盤がはばんでいたが、これを米陸軍が水圧を使用する新技術により切り開きに成功したのである。人口湖ガツン湖は太平洋の水面よりはるか高位置にある。佐渡丸はガツン湖で有料の給水を行った。

佐渡丸がパナマ運河に入ると、米国海軍の海兵隊数名が乗り込んできて、ブリッジと機関室に数名ずつの武装海兵隊員が配置され、有線電話線を引き、船の操縦の監視をする。当時、確か、日独伊の同盟が結ばれていて、日本は、満州国を作り、日支事変(日中戦争)の最中で、国際関係は、欧米に対し極めて悪い状態となっていた。パナマ運河は、米国海軍にとっては重要な艦隊の移動、即ち、大西洋と太平洋に移動する場合、もし、パナマ運河が使用不能になると、南米南端の大迂回となり、約 50 日間の遅れとなる。当時米国人マハン大佐が、軍事小説に、日本船がパナマ運河に於いて自沈するということを書いていた。

さて、自分が乗船して約 3 航海をやったが、最初のうちは彼ら海兵隊と冗談を言ったりしていたが、最後の航海の時は、口もきかず緊張して監視の目を光らせていた。ところが、ある航海で、運河通過時、自分が主機のハンドルをとり、エンジンを操縦すると、あるシリンダーで大音響が起こる。海兵隊も緊張する。これはノッキングと言って、燃料噴射装置の事故より起こるが、燃料が入りっぱなしになり、正しい噴射時期が失われ、上昇して反射下降するピストンの上に、過剰の燃料が蓄積され、ピストンが逆方向に押し下げられる異常着火で、ノッキングと称し、大音響を伴う。・・・主機のシリンダーに分配送油する分配弁装置の分解手入れを部下にやらせた時微少のゴミが入りこんだため、ある分配弁にそのゴミがつまり連続給油状態になるのだと申し出て、再度の点検洗浄をやってもらう。以後、このノッキングは起こらなくなった。

さて、佐渡丸は無事大西洋側に行き、入口と同様の方法で大西洋に出て、海兵隊員も下船した。船はメキシコ湾を通過。フロリダ海峡を経て大西洋を米国東海岸を北上し、ボルチモア、フィラデルフィアの港等に寄港。終着点ニューヨーク港に着岸する。ニューヨーク港で大体の荷物を降ろし、主機の一方の手入れ即ちオーバーホール等を行い、再び北上し、ボストンに行き、引き返してまたニューヨーク港で積荷を行い、帰りの航海になる。

ボルチモアでの出来事

第 3 次航の時であると思われるが、余暇ができて士官 4・5 名で街の見物に出掛けた。我々はちょうど夏季で、白の士官制服を着て、街路を横に並んで見物していると、どこかで警官が我々を呼び止め、何やらあくたいをつく。よく聞いてみると、おまえたちは日本人だろう。ヒットラーという悪人と手を結んで

いる奴だ。大きな顔をして街を歩くなということだった。我々は分かったと言ってなだめて去った。

ニューヨーク

ニューヨーク港は多くの船が集まり、荷揚げの順番を待っていて、荷役時間も何時間と制限されていて、時間を超過すると罰金をとられる。甲板荷役機械も自分の受け持ちであったので、故障が起こると直ちに修理を要し、自分も再々奮闘したものである。港近くでは子どもたちに石をぶつけられた。多分日支事変(日中戦争)のことを聞きかじっての仕儀と思われた。

余暇ができて地下鉄に乗ったり、港近くのデパートへも行ったが、我々に対する態度は何らの悪感情も見られず、海岸などを散歩していても、通りがかりの人たち、自動車に乗った家族連れも、手を上げて好感を示し、こちらも応答した。船乗りは、当時世界的にも敬意を払われ、好感を持たれていた。

.....

昭和 16 年 2 月 4 日に横浜港に帰港したが、これが佐渡丸最後のニューヨーク航海の第 4 次航で、以後、大戦突入の各種の航海が続くことになる。郵船会社の文献によれば、佐渡丸は昭和 16 年 2 月 8 日付けで陸軍に徴用されている。

乗船期日が近づいて播磨ドックに帰ると、約 1 カ月出航が延期されたという。本船の艀装工事が始まった。我々士官の居住区であるボートデッキの船橋後部より、中央の煙突を中心にして士官室の上部に鉄骨組みの床が長方形に作られ、船首及び船尾の甲板にも、やはり鉄骨組みの陣地のような組み立て工事が進行した。あとで分かったが、この陣地に、船首に 3 門、船尾に 4 門の高射砲が設置され、我々居住区の上方陣地には、約 10 門の対空機関砲が取り付けられ、陸軍の高射砲中隊 1 ヶ中隊が乗り込んでくることになる。我々はどうやら米英と開戦するのであると推察した。あの生産力強大な米国とやって勝てるのかと疑問に思った。

さて、工事が完了して出航となり、福岡市の博多湾のいづこかで、戦車揚陸訓練が始まった。次いで青島で戦車揚陸チンタオの実戦に参加する。駆逐艦 3 隻により青島の砲台を破壊後、陸軍の大八ツに戦車を載せて、大八ツは青島に向かって行った。青島の砲台よりの砲撃があったが、我々のはるか手前しか届かず、駆逐艦の砲弾は、気楽に砲台を破壊した。

船舶の徴用が陸軍により行われ、その管理運用を船舶と海を知らない陸軍の連中がやったことが、我々船乗りにとり甚だ不快で、作戦中多くの不快な事件に出会い、また作戦上も多大な錯誤を生じ、軍需品の輸送等にも支障を来し、また無駄に船を失ったことは無念の極みである。

当時大本営は広島にあって、我が佐渡丸も再々寄港した。まず陸軍に対し驚いたことは、例えば大型船の機関長を集め、汽缶への石炭の投入訓練を行ったのにはあきれた。彼らは機関長が海軍で言えば佐官級の予備将校であることを知ってか知らずか、その無知にはあきれた。

マレー 馬來半島上陸作戦

昭和 16 年〇月〇日、佐渡丸に陸軍中尉を部隊長とする高射砲中隊が乗船し、外洋に出て射撃訓練が行われる。中隊は約 30 名くらいであったと思う。陸上の射撃と違い、動く船上での射撃で、相手の戦闘機も動くし、対潜航動でジグザグ航法をとるので、命中率は甚だ低いと思われた。しかも海軍軍艦の乗組員と違い、陸兵であるから余計むづかしい。砲の配置は、船首に高射砲 3 門、船尾甲板に高射砲 4 門、中央のやぐらに高射機関砲約 10 門と覚えている。

昭和 16 年 11 月末日、佐渡丸は海南島の三亜港に入港した。港といっても岸壁等はなく、沖どまりで、投錨して参加各船の集結を待つ。この作戦は、馬來半島を南下し、英領シンガポール基地を占領する作戦で、半島上陸作戦は、この為の兵員・武器・基地軍需品の上陸作戦で、我が連合艦隊の真珠湾海軍基地攻撃と同時作戦となっていた。佐渡丸にも約数千人の兵員が船倉内に乗船していた。

開戦前後の隠密船団

昭和 16 年 12 月 4 日午前 7 時 30 分、第 25 軍先遣兵団の将兵・武器・弾薬・上陸用舟艇・車両・自動車等を満載した輸送船団のスクリューは、ほの白い波を泡立たせて、一斉に回転し始めた。輸送船団の船舶はいずれも速力 14 ノット以上の優速船ばかりで、輸送船 17 隻、病院船 1 隻の計 18 隻で編成されていた。そしてゆるやかな動きで誘導されながら、三亜港の港外に向かって行った。

まず先航には熱田丸、那古丸、香椎丸、竜城丸が縦に並び、その 1,000 メートル左方に平行して、笹子丸、青葉山丸、九州丸、佐渡丸に、病院船の波上丸が一行縦隊を形づくった。そして竜城丸には、マレー作戦総指揮の任にあたる、第 25 軍司令部山下奉文中将^{やましたともゆき}が、香椎丸には、上陸作戦専門の精鋭部隊が第 5 師団の師団長松井太久郎中将が乗船していた。

さらにその船団後方には崎戸丸など 6 隻、またその左方には淡路山丸など 3 隻^{たくみ}が平行して進み、淡路山丸には、マレー半島コタバル付近に上陸予定の侘美支隊の隊長侘美浩少将が乗船していた。

船団の航行隊形は、縦に細長い長方形に似た形をとっていたが、集中の船と船の間隔は、500 メートルの距離が保たれ、先導する船から最後尾の船までの距離は、実に 6.5 キロメートルにも及ぶ大規模なものだった。そしてその周囲には南遣艦隊の艦艇軍が、敵潜水艦、航空機に対して厳重な警戒態勢をとりながら、船舶の群れをしっかりと抱き込むよう護衛していた。

出港

さて佐渡丸が出港すると、乗船将校は船長より何が行われるかの説明が初めてされる。米英と戦闘を開始する、船団は馬來半島上陸作戦を実施することであり、我々は男子の本懐これにつくるものなしと実感した。やがて奇妙なこと

が始まった。兵隊さんの服装が緑色の変な服に着替えられ、軍票が配布され、またジャングル戦闘の心得を記載した小刷子が配られ、それぞれの分隊長より説明がなされた。敵に見つからぬよう、今までより一層の注意が要求され、絶対に兵は甲板に出ぬように言われた。熱帯に近づき、船倉内の兵隊さんは、暑さと人いきれで大変で、臨時の通風装置が設置されていたが、それでも大変な生活状態である。

既に陸軍が侵攻していた仏領印度支那の東方南支那海を南下していると、国籍不明の潜水艦2隻が北上しつつあり、船団は左方に移動せよとの指令あり、この潜水艦をさける。かくして船団は馬來半島付近で、それぞれの任務方向に分かれ、佐渡丸は12月7日深夜、シンゴラ沖に投錨する。乗船部隊は直ちに舟艇を降ろし、兵員は各種兵器を積み、シンゴラ港に揚陸を開始する。夜明頃、シンゴラで戦闘機の空中戦があり、やがて飛行場は占領されたとの知らせが入る。また、米英に宣戦布告を行い、連合艦隊が真珠湾の攻撃に成功し、多大の戦果があったと知らされ、また、フィリピンにも北部リングエン湾より上陸作戦を行い成功したとの知らせがある。昼頃になって、すべてのタイ領の上陸作戦に成功したと知る。

翌日昼頃、敵攻撃機が一機二機と佐渡丸に飛来したが防空船である高射砲、機関砲の集中攻撃を受けると、反転して逃げ去った。しかし、そのうち一機が本船に至近弾を投下し、破片が甲板に飛散した。最初のうちは敵機が来襲すると、皆甲板に出て手をたたいて、船の高射砲の集中攻撃に拍手喝采していたが、破片で1人が負傷すると、以後、空襲があると甲板に出るものはいなくなった。当日の夕刻かあるいは次の日か不明であるが、停泊中の僚船が次から次へと北上して、本船を含めて2~3隻となった。どうしたのだと思っていると、港の信号所に信号機が上がっていて、「敵艦隊北上しつつあり、船団は直ちにシャム湾に待避せよ」との信号が上がっているのに気が付く。機関全速でシャム湾に北上する。

コタバルに行った淡路山丸、綾戸山丸、佐倉丸は、英領である飛行場寄り飛来した敵機により全滅してしまったが、シンゴラ等タイ領に揚陸した部隊は、マレーの虎と言われた山下奉文^{やましたともゆき}中将指揮の下、快進撃に成功して、シンガポールのブキテマ高地での激戦の結果、昭和17年2月15日に、ついに陥落してしまう。

パレンバン作戦

我が防空船佐渡丸は、駆逐艦3隻とともにスマトラ島パレンバンとバンカ島に挟まれた海域に進攻する。

やがて十数隻の輸送船団が到着。一列縦隊になり、ムシ川をさかのぼることになり、本船は対空防空をして、後方部に加わることになる。時々英機ロッキード攻撃機が佐渡丸をねらって襲ってくるが、一斉射撃を受けると、反転逃走してしまう。当時制空権はほとんど我が軍に移っていて、やって来るのは単機

の攻撃機の奇襲が主であった。

さて、航列を組みムシ川を進攻し始める。自分はこのんきに読書をしていると、ボーイが来て敵襲だというので、甲板に出て見ると、6機の大型爆撃機が本船めがけてジャングルすれすれに襲ってくるのが見え、これは一寸やばいぞと、サロン室の壁に足を広げて突っ立ち、両手で耳をふさぐ。爆撃機はどうやら米国のB17型と思えた。本船の高射砲は機関砲も敵襲の場合を想定し、銃砲口を殆ど水平に向けている。敵機は高度約500メートルの超低空で、最初は友軍機かと思われていたが、こちらから合図しても翼を振らない、すわ、敵機ということで、大騒ぎとなったのである。自分もボーイに、友軍機だよと、見ていた。

さて、敵編隊は本船のみを目標として、たくさんの爆弾を投下して飛び去った。船は目茶目茶に揺れ、かろうじて自分は立っていた。一瞬の出来事である。他船の話しによると、佐渡丸は多数の水柱の中に、その姿は見えなかったようで、やがて水柱がおさまったら、佐渡丸が異常なく姿を現したそうである。命中弾は無く、至近弾のみで、さっそく船の損傷を調査したが、外板に2,3カ所の漏水箇所があって、応急修理を行った。

以後、単機の空襲はあったが、無事船団はパレンバンに着き、軍需品の荷降ろしを完了し、任務を終えて河口に出て、それぞれの目的地に分散し、出港して行った。佐渡丸はパレンバンにて落下傘部隊を乗せ、バンカ島付近に投錨した。

佐渡丸は昭和17年2月15日に陥落しているシンガポール港に向かい、着岸した。港には倉庫が並び、銃剣の付きの小銃をかつぎ、ひとりの衛兵が倉庫の周囲を巡回するのみで、他に人影は見当たらない。落下傘部隊はここで下船したが、佐渡丸の防空中隊も船員も一切上陸は禁止された。退屈した陸軍防空中隊の連中が倉庫の衛兵のいないすきを見ては、倉庫内部の品物を、こっそり船に持ち帰るということを始める。ウイスキーや菓子等もあり、はしゃいでいた。これを見ていた船員も同様の行動をとる連中が出て来て、部隊兵とケンカとなる。兵隊でないお前達は生意気だというのである。倉庫にある物資は日本品と違って珍しく見え、盗品を見て我々を喜ばしたが、もめ事が起こり、我々士官と隊長と相談しやめるように通達したが、やめない。衣類を幾枚も重ね着して妙にふくらんで帰る者、傘などを衣類の下に幾本も隠し持ってくる奴等あり、嚴重に再度注意した。ある時、防空隊の連中が大きな箱を多人数で船にかつぎこんだ。見ていると、出てきたのは幼児の衣類ばかりで、船員は皆で嘲笑したものである。

空襲という警報が出ると、ボートデッキの壁に背を寄せ、両足を投げ出している1人の兵がいた。隊長に聞くと、彼は駄目なんだという。使いものにならないのだという。頭が空襲という呼声で変になり、あのようになってしまうのだという。考えてみると、敵の攻撃機から真向からの銃弾と正面に向き合い、射撃しなければならぬので、恐ろしくて射手も殆ど目をつぶってしまうそうである。

本土空襲

昭和 17 年 4 月 18 日に佐渡丸は本土に帰航していて大阪湾に停泊中の記録がある。この日は米航空母艦ホーネットが本土近海に進攻し、その艦載機が関東地方より関西地方まで初の本土空襲をした日である。

佐渡丸は本土を出港して比島に向かう。比島での作戦はちょっと困難を極めたようであるが、遂に昭和 17 年 5 月 5 日、マニラ首都の港の要塞の米軍との激戦をへて、コレヒドールの要塞が陥落し、マッカーサー司令官は豪州へ逃避した。(アイ シャル リターン)

既に開戦以来、商船の遭難はおびただしく、佐渡丸が神戸に最後に帰港したのは昭和 17 年 7 月 29 日頃であったが、8 月某日、佐渡丸は門司からラバウルに向かう。パラオを経由してラバウルに着岸する。

ガダルカナル輸送作戦

佐渡丸が内地を出た頃、ラバウル南東約 600 マイルのソロモン群島のガダルカナル島に、海軍が設営した飛行場を含めて米軍が逆上陸。彼我の間に激しい戦闘が交わされていた。大本営が全く予想もしていなかった時期・地点から、米軍の反攻が始まったのである。

ラバウルに着いて見ると、ガダルカナルの戦況は予想以上に苦戦であって、増援の本軍の悪戦苦闘が目立っていた。同島への輸送は駆逐艦によって行われている事も知った。

9 月、佐渡丸は切迫したガ島への増援部隊をパラオからショートランドに輸送し、さらに、マニラ、ダバオからの増援部隊を運ぶため、9 月下旬ラバウルを出発、比島に向かった。

10 月 12 日、佐渡丸は比島からラバウルを経て、ショートランドに前進。ここで、笹子丸、崎戸丸、吾妻丸、南海丸の 6 隻の高速船団を編成した。主たる積荷は、ノモンハン方面で使用した野戦重砲で、第四水雷船隊に護衛された泊地を出発、ガ島に向かった。この輸送は、戦争の帰すうを決する重大な輸送であった。

6 隻とも防空船であったようである。14 日の昼、2 回にわたる空襲を受けながらも、午後 10 時ガ島北西岸タサファロングに到着。揚陸を開始した。船団の外周には、敵潜水艦及び対岸よりの魚雷艇の襲撃に備え、水雷船隊が防御陣を張った。また、戦艦比叡が来て、敵飛行場をその主砲で攻撃した。主砲の発砲音は物凄く、我々の腹にづしんと響いた。しかし、15 日夜明からの敵機の空襲は猛烈を極め、笹子丸、九州丸、吾妻丸は炎上する。しかし、8 割方以上揚陸を終了した佐渡丸・崎戸丸、南海丸は、指令により、かろうじて戦場を脱出。ショートランド泊地に帰投した。炎上した笹子丸に乗船していた同級生に後で聞いたところ、揚陸の翌日敵艦隊が来て、揚陸地点は猛爆撃と砲撃を受け、揚陸した軍需品はほとんど失われ、彼は兵隊さんとタコツボ生活に入り、 Deng 熱等の熱帯病と飢えで、タコツボより夜間のわずかの間、水を飲みに行くとい

うひどい生活となったという。

11月に入るやガ島をめぐる情勢はいよいよ悪化し、第二師団の総攻撃が失敗に終わったころから攻守ところを換える形勢となった。島周辺の制空権も完全に敵の手中に入り、日本軍は正に壊滅寸前の状況となった。しかし、大本営はガ島奪回の構想を捨てず、さらに第38師団を増強することに決めた。これが、第二次ガ島侵攻作戦と呼ばれるもので、この作戦中に、第三次ソロモン海戦が起こったのである。

ショートランドに待機していた佐渡丸は兵員兵器を搭載し、再びガ島に進攻することになった。出発は11月12日と決まった。天候不良の日を除いてショートランドは連日空襲にさらされていた。8日朝、第二梯団の輸送船8隻入港。12日は快晴で、第38師団の兵員と舟艇の搭載を終えた11隻の船団は午後3時半、11隻の駆逐艦に直衛されて、ショートランドを出発。ガ島へ向かった。

12日夜、第二艦隊はルンガ泊地において巡洋艦5隻を基幹とする敵艦隊と遭遇した。これが第三次ソロモン海戦である。この海戦を知った船団は直ちに反転北上して一応難を避けた。

翌13日午後3時半、船団は再びガ島に向かって出発したが、翌14日朝、イサベル島西方海面で遂に敵機に捕まった。友軍機の反撃や対空砲火の応戦により敵を退けた船団は分散隊形のまま、ガ島目指して前進した。

午前11時頃、佐渡丸は第二回目の攻撃を受けた。後方より急降下してきた艦載機8機は熾烈な対空砲火をくぐり抜けて爆弾を投下、そのうちの3発が船橋に命中した。双眼鏡を片手に従容として「面舵一杯」といつもと少しも変わらぬ態度で命令する広瀬船長の声を聞いたのは、その時が最後であった。船長の身体は、一片の肉切れを残したのみで、血しぶきとともに飛散した。船橋は大爆音を上げて崩れた。当直の若林三運も即死し、海図テーブルのカーテンの中に、毛深い右足だけが残った。吉越一運は直ちに消火に全力を上げ、船長に代わる。乗船中の第二船舶団長田辺少将は、戦艦艇に移乗してしまった、

さて、14日、平川次席二等機関士と共に二直の当直で、機関室に居たが、突如船橋がやられたらしく、二基の主機の前部操縦ハンドル付近の前方に、ドタドタと多数の落下物が機関室まで落下する。我々は直ちに船橋との速度信号指示テレグラフを動かすが、作動不能、電話室に行き電話をかけるが、これも通じない。そこで初めてブリッジがやられたと確信した。我々はハンドルの下に身を潜めていると、次から次へと爆弾の炸裂音を9回聞く。ふと足下を見ると5ドル紙幣の束が目につく。これは当然敵機の航空兵の持ち物以外には考えられない。自分はこんちくしょうと皆破り捨てようと破ったが、まてよと思い直し、1枚を組み合わせてポケットに入れる。主機及び補機の点検を行うが、大した損傷はなく、ただ一気筒の冷却水パイプに亀裂が入り、漏水個所が発見されたが、その他は全く無事で、主機の運航は何ら差し支えなく、ただ甲板上の状況は全く不明で、機関はひたすら全力運転を続行する。

そのうち、火災発生の際の煙が機関室に侵入し、我々は手拭いで口をふさぐ。何

時が過ぎたか知らぬが、急にあたりが静かになったので、自分は機関室を上り、甲板に出て見ると、なんと見渡す限りの海面には何物もなく、ただ佐渡丸だけが、単船全力でぐるぐる航進している。ブリッジは消し飛び、煙突は朝顔の花を切り裂いたようになってつぶれていた。早速運転士官一運と相談する。船長以下、当直中の全員は皆戦死し、火災は全部消火したと聞く。航海不能であるので、取りあえず人力操舵に切換えて付近に見えるセントイサベラ島へ向かうこととなる。船倉内に約 4000 人の兵隊がいるが、全員無傷であるというので、島に行き、上陸して敵と闘おうということに決して、島に向かう。

自分の船室に行ってみると、通路の壁、通路上部には、おびただしい肉片が飛散・付着。自分の部屋の天井は抜け空が見える。サロンに行ってみると、昨日まで碁の相手をしていた一等機関士河内さんは、爆弾の破片を頭部に受け、口から泡を出しておられ、機関長藤田さんがなすすべもなく見守っておられたが、やがて河内さんは息を引き取られた。次席三等機関士丸田さんも足の指をやられ、苦痛でうなっている。

当時佐渡丸には 88 名の乗員がいたが、戦死されたのは、船長以下 8 名。その他陸軍機関砲射手全員戦死。戦死者合計約 50 数名。乗船部隊は全員無事。

後部甲板の高射砲隊員に聞くと、敵機一機が船橋に激突し、その首が高射砲陣地どころがり海にけ落としたそうであり、自分が機関室で手にした 5 ドル紙幣は、おそらくこの操縦士の持ち物であったと推察される。船団の船舶は 3・4 隻ガ島方面に突っ込んだり、佐渡丸周辺で撃沈されて全滅であるという。

セントイサベラ島に向かおうとしていると、2 隻の小型の軍艦が接近してくる。すわ敵艦かと身構えていると、発信信号で味方駆逐艦とわかる。2 隻の駆逐艦にはさまれて北上。スクールで信号が途切れ、逆方向に進み、11 月 15 日、シュートランド基地に着き、投錨する。満身創痕で舷側には数十カ所の破口、煙突は裂け、無線設備、航海器具も完全飛散、主機の中間軸受けカバーも全部破壊されたまま。乗員部隊をシュートランド島へ上陸させ、その日は被爆の後片付けや、死体の収容処理をして、夕刻、避難錨地に転錨した。

16、17 日と軍需品の陸揚げに全力を上げる。基地海面には大阪商船のハバナ丸と本船のみで、ショートランドの飛行場には友軍機の姿はなく、南方戦線より艦船がぞくぞくラバウル方面に引き上げていく。中には本艦が誘導するから行かぬかと信号があったが、まだ仕事が残っているからとことわる。

18 日早朝、自分は作業着の洗濯をしていると、「空襲」という叫び声がしたので、上空を見ると、当時最大級のボーイング B17 爆撃機 10 機とロッキード P38・6 機の船爆連合の編隊である。いよいよ最後が来たと思った。編隊は水平爆撃を繰り返し、そのうちの大型爆弾が二番ハッチ付近を貫通し、船は前部より沈み始める。そこで我々は陸岸に擱坐することに決し、自分と 2 名の機関士が機関室に入り、主機を起動するが、既に推進器は海南に半分以上出ている、急回転し、ガバナーが作動し、主機は停止してしまう。これを何度も繰り返すうちに船体全体が沈下してスクリューが大部分水面下に没し、やっと主機の運

転ができ、近くの海岸の砂浜に乗り上げに成功する。しかし、浸水は激しく、船は大きく左舷側に傾斜を始めたので、午後零時 50 分、全員は陸上に退避する。佐渡丸はそれから約 3 時間後、右舷外板を約 40 メートル以上に出したまま海中に横転沈坐した。

「佐渡丸の奮戦ぶりは、その後天聴に達し、19 年 6 月、船長広瀬専一には、功四級金鵝勲章と勲五等双光旭日章が贈られた。だが勲章は激しい神戸空襲のため遺族の手には遂に届かなかったという」

上陸した我々は、わずかの米とコンビーフの缶詰を持ち出しただけで、海岸のわずかの場所に小型テントを張る。うしろはものすごく昼なお暗いジャングルで、時々スコールが来る。近くのジャングルには部隊がいて、彼らからタマネギを分けてもらい、朝昼晩すべて米飯と生タマネギのぶった切りとコンビーフの食事が続く。ジャングル樹林は上空まで高く、空はほとんど見えず、直径約 10 センチの藤かづらが地上から上空まで曲がりくねってはびこり、夜間就寝していると、まるで大工仕事が行われているようないろいろな奇声がして不気味である。一体いつになったら脱出できるかと不安な日々が続く。

我々がジャングルに入って約 10 日ほどたったある日、郵船会社の豪州航路の客船・箱崎丸が単船で通過。前線に向かうのが見えた。基地司令部では、もしこの船が無事返ってくれば、乗船して良いということで、いちろの望みを持っていたところ、なんと無事帰港し、我々はやっと解放され、乗船する。かくて、ブーゲンビル島ショートランド基地のエベレッタ基地に最後の別れをつけ、台湾で船を乗り換え、無事日本本土に帰る。

—鳴門丸の最後—

横浜に着岸中の鳴門丸に、昭和 18 年 3 月 24 日編入。同船はラバウルにある海軍航空隊の専属備船であり、積荷は、爆弾、魚雷、ガソリン等であるという。これはえらい船に乗ることになったものだ。一発食らえば轟沈間違いなしである。しかし乗組員は皆わりあい平気で、やられやしないよと言っていて、ソロモン方面の戦況はほとんど知らず、ほがらかであった。

某日、横浜より横須賀に回航し、部隊を載せ、4 隻の駆逐艦に護衛され、ラバウルへ向かう。ところが途中ソロモン方面の戦況が悪化。ラバウル経由では間に合わぬと指令が来て、太平洋のど真ん中で部隊の洋上移送を実施し、駆逐艦隊は全速力で南方へ消えていった。本船は単船ラバウルに向かう。航路はサイパン、トラック、ラバウルであった。各港ではタラップを降ろして、米つぶでよく小アジが釣れた。小アジを生かして置いて航行中 大きな釣り針に小アジをかけ、ロップで引いて行くと大物が釣れる。ある日大きな平アジが掛かり、さっそく刺身にして、一同甲板でビールを引掛けた思い出がある。

この航海でのトラック島では、多数の船舶が停泊していたが、後に米艦隊に全滅させられてしまうことになった。我々の見た最後のトラック島であった。

ラバウルに入港し、荷を降ろして直ちに帰港する。途中サイパン島に入港。当時の南洋興発貿易会社の製品等を買込み、横浜に入港する。サイパン島ではサウザンクロスウィスキーがビール瓶1本で1円だったが、横浜公園の前のスタンドでウィスキーを注文してみると、カットグラス1杯が7円であるには驚いた。我々はこれに味をしめ、次の航海ではしこたま買入れようと張り切っていた。

横須賀より危険な荷物を満載して、1隻の駆逐艦に護衛され、無事ラバウルに投錨し、ソロモン方面等の遭難水兵を数十名乗せて、帰路に着く。無事サイパン島に入港。我々は土産ものをしこたま買い込んで出港。確か、昭和18年8月8日と思われるが、自分は二直(8時~12時)で、船室のベッドの上に横になっていた。午前7時頃、船は硫黄島付近を航行していたが、突如大音響とともに、自分は天井にたたきつけられた。すわ雷撃を食らったと判断。ベッドを飛び降りると、床は既に後方に傾いている。

早速機関室に行こうと、入り口に行ってみると、一直当直機関士が、もう駄目だと海水と油にびしょぬれの姿でタラップを上がって来るところであり、機関室に水がごうごうと流れ込み、渦をまいていた。自分は腹がへっては戦はできぬと思い、ちょうど朝食前であり、食料をさがすが、ふと船長室に土産物のバナナがつり下げられていたのを思い出し、直ちにこれを数本いただく。ボートデッキに行ってみると、既に救命ボートは、重要書類等を載せ、船を離れていて、数名の士官がテンマ船をつないであるロープを切るのに苦労しているところであった。そんなことでは駄目だと言うが、一同一生懸命である。自分は早く飛びこまないと船と共に引きずり込まれると思って、沈没しつつある後部水際へ向かう。やがて退船命令が出る。ブリッジにも行って見たが、先導の護衛駆逐艦より「敵潜いずこにありや」と、本船に聞いてくる始末で、魚雷は、後部右舷方向より3発命中したが、内2発が不発で1発が後部船倉に命中炸裂したのである。ちょうど帰りの航海で空船であり、轟沈はまぬがれ、命中は後部であったので、沈没までに約40分の余裕があった。

さて、救命着を付け、冷えてはいけないと外套を着こんでいたが、一切を脱ぎ捨て、はだしになり、沈没水面より飛び込み、船を離れようと必死に泳ぐ。約50メートルくらい泳ぎ、本船の方を見ると、本船はおもてが非常に高くなっている。ところが高くなった船首の付近に多数の水兵の姿が見え、ロープを下ろして降りているのが見える。再び必死に本船を離れる。また振り返ると、本船は船首が直立状態でねじれるように自分の方に倒れ掛かっているので、必死に泳ぐ。次に振り返った時には、本船の姿は無く、浮遊物や泳ぐ人々が見えているのみであった。自分は、やや大きくまとまった浮遊集材にとりつき、同じくこれに捕まっている人々が約10名くらいいた。駆逐艦は救命ボートを降ろして、救助に当たらせながら、艦は停止することなく大周りに、しきりに爆雷投下を繰り返し、ボートに人がたまと、横付けして遭難者を引き上げ、直ちに全速で航行し、爆雷投下を繰り返す。駆逐艦自体も、魚雷攻撃の危険があるの

だ。そのうちに自分は、おおうねりで酔ってきて吐いてしまった。隣にかんべんしろとあやまる。バナナは既に皆吐き出してしまったのである。

そのうち誰からともなく、「海ゆかば」の歌声が上がり、一同合唱する。かくて自分が駆逐艦に引き上げられるまでに 3 時間が経過し、引き上げられた時には、左足がしびれてきかなかった。艦の機関室付近で体を温めて、やっと歩けるようになり、士官室に通され、紅茶等ご馳走になる。

聞くとところによると、例のテンマ船の連中は、船と共に海中に引き込まれた。一旦は水面に浮きあがったが、今度はメインマストにより再度引き込まれたという。この時、三等機関士が死亡したという。船員の死者 4 名、乗船部隊の水兵たちの戦死者約 20 数名であった。大量に買い込んだ土産物は、船と共になくなってしまった。

駆逐艦は全速力で本土に直行。五島列島を左に見て、宮崎県油津港に入港し、海軍作業着の意気消沈した格好で、自宅に帰ることとなった。

—鳥取丸～母校勤務～戦災～終戦—

自分は、二等機関士、月給 114 円、手当 53.5 円で、昭和 18 年 9 月 29 日、雇い入れで、横浜港で乗船した。

鳥取丸は、某日横浜を出港、東京湾を出て、浜松の沿岸の遠州灘を航行中、後部より敵潜の攻撃を受ける。本船を挟んで 3 本の雷跡が見えたが無事に過ぎ、瀬戸内海に入り、広島宇品港に入港した。宇品で部隊を載せ、6 隻の船団を組み、セレベス島の輸送作戦に参加した。

.....

鳥取丸はもっぱら、内地または上海より南方に補給部隊を輸送する。既に敵潜水艦の出没は激しく、最も危険な場所は、内地より上海の深海区域、台湾の基隆港外、上海より台湾へ渡る海域、即ちシナ（中国）大陸より東方の台湾またはフィリピンへ渡る海域であり、船は通常の航路を行かず、必ず陸の沿岸の水深の浅い場所を水深測量を行いつつ航海する。普段では見る事のないベトナムの陸を見ながら南下したりする。

乗船部隊は甲板上で、万に備え筏を組み、しきりに遭難訓練を実施する。我々機関室の当直者は、それを横目に見ながら当直に入る。機関室に入る時は、これが最後の当直になるかと、覚悟して入室し、当直交代して上に上がると、もう大丈夫だと思った。兎に角甲板に居れば、魚雷にやられても何とかかなると言う自信があった。しかし、冬季の内地付近の航海は不安である。たとえ泳いでも凍えてしまうからである。したがって、冬季の内地帰りは好ましくなかった。

.....

戦局は、いよいよ不利となり、シンガポールへの輸送も難しくなってきた。シンガポールへ行くには、特別の航路を要した。たとえば、内地を出て、上海に行くように見せかけ、西や東に数日間の航海を繰り返しながら、やっと敵の

目をくらまして到達するというような、船路の大ジグザグ航法に変わり、乗船部隊も船内に入らず、すべて甲板上で過ごすという状態を呈してきて、それでも成功することはまれになってきた。

東京湾出口で、生き残りの優秀空母が雷撃を受け沈没した。以後、マッカーサー率いる米大船団と艦隊はフィリピンのレイテ島に上陸。フィリピンは敵の手に落ち、フィリピンの我が部隊も玉砕してしまう。北方のアッツ島、キスカ島の玉砕も報じられてきた。ビルマ方面でも、無謀な補給のない戦闘で、悲惨な敗退を余儀なくされた。南方のラバウル基地には、ニューギニア等の敗兵が、約 10 万集まっていたが、この孤立化した基地を素通りして、フィリピン攻略より、次第に本土に迫った。

昭和 18 年 12 月か 19 年 1 月頃、鉄鉱石あるいは石炭を積んで、九州北部の八幡製鉄所に入港した。

門司に入港して、急須を買おうとしたが、店では金はいらないから何か甘いものはないかと言うので、ちょうど軍の酒舗で手に入れたコンペイトウがあったので、それを渡すと喜んで交換してくれた。既に内地には、甘味料は皆無となっていたのだ。ふと岸壁を見ると、2 名の憲兵が、大人に数俵の砂糖の大袋を積み込んで、陸揚げしようとしているのが目につく。この野郎ども、とんでもないと憤慨した。

．．．

自分は、鳥取丸を、昭和 19 年 5 月 25 日、肺浸潤で下船し、静養生活に入る。昭和 20 年 4 月 27 日付けで郵船会社を退職することになり、会社では、次の職務を心配してくれて、自分は母校勤務を選び、昭和 19 年秋より、母校・東京高等商船学校に行き、生徒の教育に携わった。

住居は豊島区駒込 6 丁目で、都電山手線駒込駅より徒歩 15 分のところで、染井墓地の南端に接した 2 軒長屋の 1 軒だった。そこで、妻は長女を無事出産した。

戦災—東京空襲

昭和 19 年 11 月に入ると、サイパン島を基地とする B29 が飛来するようになり、灯火管制、防空演習、学童疎開が始まり、いよいよ東京は臨戦態勢となる。各所には防空壕が掘られ、連日、警戒警報、空襲警報が響く。

おそらく昭和 20 年 4 月 7 日と思うが、ちょうど自分は千葉市の妻の実家を訪ねていたが、当日駒込方面で B29 の爆撃があったと報道があり、直ちに帰ることにし、蘇我駅に行くと、秋葉原までは行けるが、山手線は分からぬと言う。行くところまで行こうと秋葉原まで行くと、山手線が動いていた。

駒込駅を降りて家へ急ぐと、網が張られて先へ行けない。我が家はその向こうにあるので、網をくぐって先へ行くと、なんと直径 10 メートルくらいの大穴があちこちにあり、これは家族は家ごと爆飛してしまっているかと不安な気持ちで先へ進む。ところが、知り合いのおばさんが向こうから来てあなたの家は

大丈夫だと告げられた。B29 の十数個の爆弾が投下されたようで、焼夷弾はなかったようである。家にたどり着くと、一同無事で、奥の座敷の畳の上に、なんと、染井墓地の墓石が転がっているではないか。以後、妻と子は千葉へ疎開させることにし、父と自分だけ残って、母校へ通勤することになる。

昭和 20 年 4 月 13 日夜、警戒警報、続いて空襲警報となり、B29 爆撃機 160 機が襲う。豊島、淀橋、小石川、四谷、麴町、日本橋、板橋、渋谷、牛込、滝野川、向島、中野、王子、足立、本郷、下谷、葛飾、杉並、江戸川、城東、浅草の各区域で、罹災者 640,932 名、死傷者 7,205 人であった。東京都全域に及んでいた。夜半過ぎの爆撃であった。

我々父子は防空班に誘導され、駒込駅まで行くが、向こう側も火炎に包まれ、先には行けず、我々の家屋も続々火炎が広がり、遂に、電車線路に降りて、身を護ることになる。幸い山手線は、巣鴨駅より下り坂となり、駒込駅付近ではちょっとした谷間になっていて、両方向からの火炎が、直接身を襲うことは避けられた。しかし、猛烈な熱気が身を包むので、かぶっていた鉄兜で、線路わきの側溝の水を汲み、頭から掛けて我慢していたが、持っていた救援米は捨ててしまい、死の覚悟をしていた。ところが幸い、片方の火炎が先に燃え尽きたか、下火となり、やっと楽になり、夜明頃には、駒込橋に上られるようになった。

当時駒込橋の向こう側に交番があり、巡査 1 名がいた。見ると交番の前に半ば焼けかかった非常米が投げ出されているので、巡査にもらっていいかと言うと、持って行けと言うことで、ちょうどレインコートを着ていたのも、その中にかき込んだ。橋の向こうは富士見町の電車の交差点で、左へ行くと下りとなり、千駄木町を経て、上野の不忍池、即ち七軒町に行く。交差点に行くまでは、火炎が路を横殴りになでまわしていた。

．．．

母校の先輩教授が転勤になり、家族が疎開することになったので、その家に留守番代わりに住むことになった。場所は西部新宿線の沼袋で近所は広場や田畑が多くある。ここなら安全であると思われ、千葉より家族を呼び寄せ居住する。父はもういやだと言い、柳町に 1 人でいることになる。当家の後ろは鈴木さんといい、家族全員が住んでいた。鈴木さんは隣組の防空班長となっていたが、自分が行くと、さっそく副班長にされた。

昭和 20 年 5 月 25 日、東京に B29, 250 機の大空襲があり、都内は勿論、立川市、北多摩郡にまで及ぶ。今回の空襲では、人家の少ない沼袋まで飛来した。夜半、空襲警報があり、大丈夫と思っていた沼袋にも焼夷弾が落下され始めたので、家族を先に避難させる。自分はスコップを持ち出し、庭に出て、貴重品を少しでも残そうと、穴を掘っていると、ザーという焼夷弾の落下する音がして、西側に聞こえるので、始め伏せようとしたが、横になると敵弾の当たる面積が大きくなると思い、音の近づく方向に、軒に添って立ったまま横向きに平たくなっていると、たちまち焼夷弾の雨が降ってきて、そこらじゅうに火炎が

上がり、あたりは昼のように明るくなる。着弾が終わったので、直ちに家の中に入って見ると、座敷と言う座敷に油脂が飛散し、燃えだしている。風呂場の水で消火しようとしてみると、そこでも燃えだしている。家中たちまち手のつけられぬ状態となり、鈴木さん呼び合流したが、防火班は誰ひとりとして集合して来ない。道路には金属製の約 30 センチ（直径 10 センチ・6 角）の貫通焼夷弾があちこちに突き刺さり、火を噴いていて、見渡す限りの住宅に火の手が上がっていた。B29 爆撃機数機が超低空 500 メートルで通り過ぎるのが見えた。我が家にも約 8 発が命中したと想像された。我々は万事休すと、退避しようとして家を後にする。家の前の坂道を行くと T 字路になった路地があり、それを右折して行くと広場があると言うので、その方向に向かうが、火炎が路を横殴りに行く手をふさいでいる。このままでは焼け死んでしまうからと鈴木さんを促して火炎を強行突破することに決断。手拭で口をふさぎながら走り抜けたが、無事に広場に出ることができた。

夜が明けて、先に逃がした妻子たちはどうなったか気がかりで、退避者のいる広場を隈なく探すが見つからず、疲れ果てて、午後となり、ふと 1 軒の家をのぞくと、中に両家族がいるではないか。なんだかのんびりと茶などふるまわれて、談笑している様子なので、ちょっと二人に腹を立てた。

5 月 29 日、自分は母校がどうなっているかと、交通が麻痺しているので、沼袋より母校まで徒歩で行った。炊き出しのにぎり飯を持って、電通院付近の高台にたどり着き、小休止して見渡すと、都内に家屋は全く見当たらず、見渡す限りの焼け野原と化していた。

その時横浜方向を見ると、どうやら横浜市が昼間の猛撃を受けているらしく、赤茶けた煙が上がっているのが見えた。やっと越中島の母校にたどり着くと、周囲全く焼失した中に、忽然と母校が寮舎及び教室・本館共存在しているではないか。母校にも焼夷弾が落ちたが、生徒たちが全部消火したと言う。校内に避難者が充満していた。

夕刻、先輩教授が横浜市より到着して、もう駄目だ、横浜市は全滅してしまったと言う。これが横浜市の大空襲で、B29・500 機、P51 戦闘爆撃機数百機による真昼間の猛爆であった。

かくして、妻子は再び千葉の両親宅に疎開させ、自分と父は柳町の焼け残りの酒屋の 2 階に住み、母校に通勤した。

・・・

昭和 20 年 8 月 6 日昼、食堂でのラジオ放送により、広島市に敵の新型爆撃機が投下され、我が方の被害が甚大であるとの放送を聞く。その時自分は、今度は東京に来るぞと覚悟した。B29・1 機が東京湾を北上しつつありとの報道がある度に緊張したが、昭和 20 年 8 月 9 日、今度は長崎市に同様の新型爆弾が投下され、やはり甚大な被害を受けたと聞く。

終戦

昭和 20 年 8 月 15 日の朝、重大な放送があるということで、生徒全員と共に食堂に待機すると、正午、天皇陛下の戦争終結の詔書の録音放送が行われた。我々は放送を聞いて、何とも言えない解放感と共に虚脱感に襲われた。2 度の戦災で我が家族は一切の所持品を失ってしまっていた。学校では今後どうするかという重大会議が開かれ、配属の海軍中佐は生徒を引き連れて本土決戦をやるかと強硬に主張するが、我々教授たちは、もうやめた方がよいと、おしなだめた。米軍が上陸してくれば、本校の貴重な教材や航海用具等がすべて米軍に接収されてしまうからと、皆で分散保管することになり、保管できる人たちが持ち出すことになる。学校の倉庫にある予備の救急食料や作業着等も、自分のように何もなくなった教授たちには十分配分された。

国内には各所に進駐軍の脅威から、各種のデマが広がる。自分は家族を守るためと、今までの母校教育の立場より、校長に辞表を提出する。ちょうど、群馬県草津町に学童疎開で行っていて東京に帰ってきた妻の妹から話を聞き、開拓農業をやろうと決断した。昭和 20 年 9 月初旬のころである。

第 2 次世界大戦に参加した我が国商船乗組員の死亡率は、実に 43 パーセント、陸海軍戦没率の 2 倍に当たると言われていて、船舶も約 600 万トンを失う結果となり、ほぼ全滅状態であった。

◇原稿用紙 135 枚にびっしり書き込まれた文章を、できるだけそのままに、途中を削らせていただいて、表記を現代仮名遣いに直し、約 3 分の 1 に短縮したものです。

◇戦争当時の輸送船については日本郵船歴史博物館のホームページ「航跡」をご覧ください。

グループ報「YUSEN」2008 年 11 月号 戦時体制へ

” 2008 年 12 月号 戦争と壊滅

” 2007 年 5 月号 歴史の生き証人「氷川丸」～その 2～

ちば・戦争体験を伝える会 市川まり子